

弥生 vol.14



平成 30 年 8 月発行 弥生神社



木と祈り

- 02 お宮の風景「例大祭」「夏越の大祓」
- 03 「端午の節句と薬玉づくり」
- 06 弥生神社 講座とワークショップ
- 07 蚕の神様を訪ねて (二)「金色姫伝説」 谷口悌三

木と祈り

- 09 「木と祈り」 森 岳人
- 10 「生命の樹」 カイズケン
- 11 「樹—大地と天空のあひだ—」 玉井ゆかり
- 13 本を読む。「樹木と人間」 小河洋友
- 14 植物紀行 (四)「サカキ」 荒谷 渚
- 15 「女神とイチジク」 和田浩一郎
- 17 和菓子めぐり (二)「落雁」 辻本 彩
- 18 旅の宿り木・6「部屋から出ない日曜記」 谷口明子
- 19 授与品のご案内 / 編集後記



四月 例大祭



お宮の風景



六月 夏越の大祓



五節句〜自然と生活のサイクル〜

日本には、季節の節目として豊作や無病息災などを願う伝統的な行事を行う「節句」があります。「人日」「上巳」「端午」「七夕」「重陽」の五節句です。節句の行事には、その季節の植物が使われ、長寿や厄除けや技芸の上達などさまざまな願いを込めて飾ったり、食したり湯や酒に浸して香りを味わったりします。身のまわりの自然の変化を感じながらの暮らしがあり、自然のサイクルを基盤とした一年の生活と行事のサイクルがあったことがうかがえます。

弥生神社ではそれぞれの節句の風習を過去の資料から学んだり、実際に節句にちなんだものを作って体験してみようと、季節ごとにワークショップを開催しています。

「端午の節句」〜薬草で「邪気」を祓う〜

五月の節句は端午。「端午の節句」は現在、新暦の五月五日になりますが、旧暦では六月の半ばにあたります。「端午」とはもともと月の「端」の「午」の日（*）を意味しており、「午」が「五」と同じ音であるため、毎月五日を指すようになり、やがては五月五日になったそうです。



端午の節句の頃は、梅雨時なので薬草が良く育つ一方、ものが痛みやすく「邪気」の多い時期と考えられていました。それゆえ中国では邪気を祓うために薬草を摘んだり、蓬で作った人形を戸口に飾ったりしていました。

そんな風習が、奈良時代には日本に伝わり、平安時代には菖蒲を蓬とともに軒に下げたり、湯に入れて菖蒲湯として浴したりしていました。香り高い菖蒲や蓬には、邪気や魔物を祓う力があると考えられていたのです。

やがて江戸時代になると、武家社会を背景に菖蒲と「尚武」をかけた「尚武（武士を尊ぶ）の節句」へと変化し、現代まで続く男の子の誕生と成長を祝う節句となりました。

端午の節句と「薬玉」

端午の節句には、香りの強い「薬玉」を作り簾や柱にかけて、邪気を祓い、厄除けと長寿の願いを込める風習がありました。

薬玉は、「麝香」「沈香」「丁子」などの香物を錦の布で包んで玉にして、造花や菖蒲、蓬の葉で飾り、五色の紐を垂らして飾っていたといわれています。中国から伝わり、平安時代には贈答用に盛んに作られたそうです。

「節は、五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などの
かをりあひたる、いみじうをかし」

(中略)

空のけしき、曇りわたりたるに、中宮などには、
縫殿より、御薬玉とて色々の糸を組み下げて
参らせたれば、御帳立てたる母屋の柱に左右
に付けたる『枕草子 三十六段』*2

平安時代の宮中を描いた清少納言による
エッセイ、『枕草子』にも薬玉について触れら
れていますし、『源氏物語』や『今昔物語集』
にも「薬玉」の名が記されています。夏の季
語でもある薬玉は、この季節の風物詩だった
のでしょうか。

毎年の秋にあたる菊の節句、「重陽の節句」
には、薬玉と同じように香りの強い物を入れた
袋「薬莢しゅめいのう」を作り、端午の節句に作った
薬玉と掛けかえていたといわれます。*3

薬玉づくりワークショップ

弥生神社では、毎年、端午の節句に合わせて
「薬玉づくり」のワークショップを開催して
います。今年は四月二十九日と三十日の二
日間開催しました。

ワークショップでは、「古代薬玉の図」など
を見ながら端午の節句や薬玉について学びま



す。その後、材料も形も現代風にアレンジして、
ご参加の皆さんがオリジナルの薬玉を思い思
いに作っていきます。

まずはペーパーバンドを裂いて輪にしなが
ら組み合わせ、玉の部分の骨組みを作ります。
バンドと洗濯ばさみで固定しながら、十セン
チメートルほどの玉ができあがります。

玉の中は、様々な薬草類。蓬や枇杷の葉、
月桂樹など乾燥した薬草をたつぷりと使いま
す。それらを包むのは色とりどりの絹布。薬
草が詰まってふくらとしたそれぞれの包み
は、糸で巻いて結びます。それから香の物
を少しずつ和紙で包みます。丁子や甘松、山奈、
唐密など。お好みの香りを選んで包み、水引
で結びます。

薬玉の下部には、江戸打ち紐を結んで垂ら
します。今回は、縁起の良い「几帳結び」に
も挑戦しました。紐には鈴やトンボ玉や木の
ビーズをつけて飾ります。

しあげに径三十〜五十センチメートルほど
の大きな葉蘭や菖蒲の生葉をつけていきます。
緑の鮮やかな生葉で、薬玉が瑞々しい印象に
なりますが、なかなか思うような形に結び付
けることができません。しあげりも予想外の
ものに。そんなところに自然物のもつ自由さ
があり、私たちは生きものを扱うがゆえの面
白さ、難しさを感じることができました。

身近な自然に目を向ける

このワークショップのもうひとつのテーマは「身のまわりの薬草」。神社周辺から採集した三十種類ほどの植物が会場に並びます。アザミ、ギンギシ、ヤツデ、ドクダミ、ハハコグサ、ヘラオオバコ、スギナ：調べると、どの植物にも薬効があります。ふだん見過ごされそうな道端の「雑草」。昔の人々はそんな草花に効用をみつけ、利用法を編み出し、願いを込めて、日常生活や年中行事に取り込んでいたのでしょうか。そんなふうに身近な植物に目を向けて、それぞれの価値や歴史に思いを馳せながら、これから迎える季節を過ごしてみたいかがでしょうか。

*1 午の日は、干支と同じ順番で十二日に一度巡ってきます。

*2 (現代語訳)「節句は、五月に及ぶものはない。菖蒲や蓬などがともに香っている様子は、とても趣がある。(中略) 空の様子は一面に曇っているが、中宮の御所では中宮御用の薬玉ということで、縫殿から色々な色の糸を組んで垂らした薬玉を献上するのだが、御帳台を立てた母屋の柱の左右にそれを掛けておく」



薬玉の材料となる
乾燥させた枇杷と蓬の葉、
菖蒲と葉蘭の生葉。



「身のまわりの薬草」を
三十種類ほど集めました。



*3 そして茱萸囊は、次の端午の節句で薬玉と掛けかえます。弥生神社では毎年、重陽の節句にあわせて茱萸囊作りのワークショップを開催しています。



弥生神社

講座とワークショップ

平成 30 年春から夏の記録です。

『大祓詞』書写会は毎月行っています。

- ②月 3・4日 「立春のお守り袋づくり」
17・18日 「上巳の節句と雛人形づくり」



- ③月 17・18日 「御朱印帳づくり」



- ④月 14・15日 「御朱印帳づくり」
29・30日 「端午の節句と薬玉づくり」



- ⑤月 13日 「お守り袋づくり」

- ⑥月 24日 弥生神社学習会
「蚕の神様を知ろう～蚕影信仰を中心に～」



- ⑦月 8日 「夏の御朱印帳づくり」
28日 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」
序章「循環する世界～死生観の形成～」
*ヒエログリフの模写ワーク



- ⑧月 12日 「紙衣と七夕飾りづくり」
19日 「ユーカリスワッグとお茶の会」
26日 【宗教・文化講座】「生と死をめぐる～民俗・考古編1～」
「葬送の多様性～中世日本人の墓と死生観～」*滑石の勾玉づくり



カイク

蚕の神様を訪ねて

谷口悌三

(映像作家／民俗研究者)

(一) 金色姫伝説



「蚕影山大神」(筑波山神社蔵)

これは蚕影神社(本社・つくば市)が頒布していた蚕影山大神の御影の掛軸です。この主神として描かれている舟に乗った女神は、金色姫と呼ばれ、養蚕を伝えた神とされています。その伝説をご紹介します。

それは遠い昔、欽明天皇の時代のこと、北天竺に旧仲国という国がありました。帝は霧夷大王といい、后との間にひとりの姫君がありました。その名を金色姫と申します。悲しいことにお后様が亡くなり、帝は後添えの皇后を迎えることになります。ところが、この金色姫の継母は意地が悪く、姫君にむごい扱いをしたのです。

この国の近くに獅子吼山というケモノが住む山があります。そんな恐ろしい山に、継母は金色姫を捨てたのです。しかしケモノたちは、金色姫を襲うどころか、拝み敬って助けました。ある日、獅子の王が現れ、自らの背中に金色姫を乗せ、神殿に連れ帰ったのです。

金色姫

豊御前



桑木のうつぼ舟

権太夫

それをみた継母は、姫君をますます憎み、今度は、鷹群山という険しい山に金色姫を捨てました。しかしここでも、鷹たちは姫君を見守り助けていました。そして、鷹狩りに来た兵士たちが金色姫を見つけ、都へと無事にお送りしたのです。

三度めは、姫君を舟に乗せ、遠くの島に流したのです。海眼山という、草木も生えない岩だらけの島で、金色姫は月日を送ります。ある日、釣り人が風に流されてたどり着き、姫君を見つけ、都へとお送りしました。

そして四度め、継母は牢獄の罪人を使って、無残にも金色姫を庭に生き埋めにしました。大王は、行方知れずになった姫君を案じて嘆き悲しみました。そんなある日のこと、庭から光がさし、宮中を明るく照らしました。皆は驚き、土を掘ってみると、そこに金色姫がいたのです。

大王はこれが継母の仕業と知り、金色姫の行く末を嘆きます。そして、この国にいるより仏様に守られたところへ逃がしてあげようと、桑の木で「うつぼ舟」を造り、勢至菩薩をお守りに持たせ、涙とともに姫君を海の彼方へと流したのです。

舟は荒波にもまれ風に吹かれ、流れ流れて、筑波の豊浦に漂着しました。権太夫という漁師が「うつぼ舟」を見つけて、薪にしようと斧を打ちつけると、中から美しい姫君が現れたのです。権太夫夫婦には子がなかったこともあり、金色姫を玉のように大切にしました。しかし姫は病を得て、亡くなってしまいます。夫婦は不憫な姫をしのんで、清らかな唐びつを創り、なきがらを納めました。

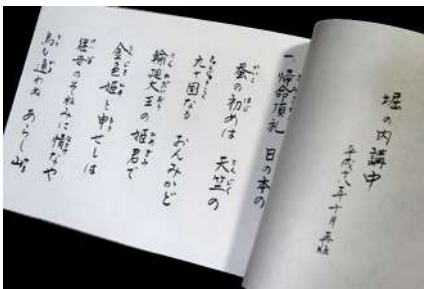
ある夜、夢の中に姫が現れ、『私に食べ物をごください。後で恩返しをします』と告げました。唐びつを開けると、姫のなきがらは無く、たくさん小さな虫になっていました。夫婦は、うつぼ舟が桑の木であったので、桑の葉を採って虫に与えてみると、虫は喜んで食べはじめました。

ある時、この虫たちが食べるのをやめ、皆いつせいに頭を上げ、わなわなとしています。夫婦がどうしたことかと案じていると、その夜、また夢に姫が現れ、『心配しないでください。天竺にいるとき、継母に獅子吼山に捨てられ苦しめられたので、いま休んでいるのです。この休みは、うつぼ舟に乗るまで四度あります』と告

げました。

ここから、蚕を飼い始めて、最初の休みを「獅子の休み」、二度めを「鷹の休み」、三度めを「船の休み」、四度目を「庭の休み」といい、その後、蚕がうつぼ舟のような繭を作ることを学んだのです。

そして、筑波の仙人が現れ、繭から暖かい衣服をつくることを教え、養蚕が始まります。金色姫は蚕の神となり、その御魂は社に祀られ、蚕影山大権現と称しました。これが蚕影山神社のはじめです。



自治館内での女性の和讃（念仏講）。
かつては神社の前で行っていた。



蚕影神社（相模原市田名）

この不思議な伝説の特徴は、養蚕は天竺（現在のインドのあたり）から「渡来人」によって伝えられた技術であると語られていること、そして「養蚕入門の心得」として具体的な内容をもっていることから他に類例のない独特の物語になっている。

権太夫夫婦のように初めて養蚕を学ぶ人に対する教えになっているだけでなく、毎年、養蚕の始めの時期にこの物語を念仏とともに唱える（和讃）ことで豊作を祈願する女性たちの講（宗教的地域グループ）も盛んに行なわれていました。

室町時代から知られていたこの伝説は、江戸時代の後期に編纂された養蚕技術書にも記載され、蚕神の由来と養蚕の心得を紹介するものとして日本各地に伝わったことも、蚕影信仰が多くの人々に支持された理由でもあるのです。

（文・写真／たにぐち・ていぞう）

木と祈り

森 岳人

(書籍編集者)



永平寺にて

この日本には、「御神木」と言われる「木」が数多くある。「木」は古来より単なる材料としてだけではなく、靈性を帯びた御神体としても扱われてきた。高樹齢の原生木や奇形の木などは、自然崇拜の中で特別な力を秘めているように感じられたからであらう。

そもそも御神木は、自然に対する畏怖や敬意を表すために祀られてきたといわれる。だから「祈り」は、自然の脅威から身を守り、かつ多くの恵みを得るために捧げられてきたはずだ。しかし、現代はどうであらう。宗教的儀式や形式として「木」を祀り祈る行為は残っているが、「木」が上記の意味で「祈る」対象として機能しているとは言い難い。多くの現代人にとって、自然の脅威によって生命を脅かされることが少なくなった今、「御神木」はスピリチュアルな縁起物となり、「祈り」は自然への畏怖と感謝というよりも、個人的な開運祈願の行為となったように見える。「御神木」や「祈り」は、もう表面的な儀式として機能しないのだろうか。ここで、御神木のようないわゆる「選ばれた木」ではなく、我々にとって「身近な木」について考えてみたい。

我々の身近にある多くの木は、原生のもではなく、後から植えられたものだ。そして、公園をつくる、住宅地をつくる、道をつくる、家

を建てる……という中には、必ず「木を植える」ことが付随している。なぜ植えるのか。「木を植える」ということになんらかの科学的な効用があるからだろう。「木」が二酸化炭素を酸素に変えてくれるとか、日差しや風を遮ってくれるとか、景観を美しくするとか……。

しかし私にはもつと根源的な内なる要請があるように思える。つまり、自覚的な「祈り」や「信仰」以前に、人々は「木」を求めているように思えるのだ。それは自然崇拜が内在化されているということでもある。なぜ人々は、山に登るのか、なぜ自然豊かな場所に行きたがるのか、なぜ人々は神社に訪れるのか。これらはある種の「癒し」や「救い」を求める心性に起因するのではないか。すなわち自然の脅威から遠のいていく現代人にとって、畏怖と感謝の「祈り」は自覚的でなくなったものの、自然に内在する「癒し」はそのまま求められ続けられているのではないだろうかということである。

私は「木」に「祈り」を捧げたこともないような浅はかな人間だが、それでも「木」がないところでは、何となく殺伐とした気持ちになる。毎年、山に登り、鬱蒼とした木々の中に身を置きたいと思う。そんな私には、やはり「木」への感謝の「祈り」が必要なのようだ。

(文・写真／もり・たけと)

「生命の樹」 カイズケン

地球上に生命が誕生して、植物が生まれ、その植物が地上に進出したのは化石の記録では四億年くらい前、地質年代ではシルル紀中期〜デボン紀のころと言われています。次の石炭紀になると、巨木の森が地上を覆い、その中ではたくさんの虫たちや、私たち脊椎動物の祖先につながる、初期の両生類が陸に上がっていました。その生息環境も多くの植物によって守られていたでしょう。

その頃の森林を形成する植物は、現代とはだいぶ違ったものであったのですが、それでも私たちが「木」や「森」と呼ぶものは、ある特定の生物種を越えた、もっと抽象的な環境であり、生命の象徴のようなものであると思います。木の梢を見上げて、幾重にも重なりあう枝葉を眺めていると、自分がとても大きなものに包まれているような気分になります。

生物の進化を「系統樹」として、原始的で単純な生物からより複雑な生物へ、という風に表すことも、実際にはそんな単純な事ではなかったのではないとも言われます。しかし、一本の幹から枝分かれする大きな樹を見上げていると、どこかなつかしい、生命のふるさとのような所を感じてしまいます。



画・カイズケン

樹

—大地と天空のあひだ—

玉井ゆかり

(宗教民俗学)

お社を囲む大きな樹の梢を見上げる。

包み込まれて気持ちが落ち着くような、しかし、自分の存在の小ささを感じさせられるような、不可思議な気持ちになる。安らぎと畏れは表裏一体である。

このような《大樹》に対する感情は、この列島に生きてきた人々にいにしえから備わってきたものなのかもしれない。理屈で論じきれない何かがあるのかもしれない。

ここでは、人が立てた巨木と、大地に根をおろした大樹を紹介したい。

真脇遺跡 木柱列出土状況



《真脇遺跡縄文館ウェブサイトより》

<http://www.mawakiiseki.jp/woodcircle.html>

真脇遺跡 復元された環状木柱列



《(社)能登町ふれあい公社ウェブサイト「のどツーリズム」より》<http://noto-tourism.com/?p=9336>



北陸地方の「環状木柱列」

—縄文時代—

およそ三千年前、縄文時代晩期と呼ばれる時代の北陸地方の集落に、太い木柱を円形に立て並べたもの——何と呼ばれていたのかはわからない——が存在していた。

それが、長い年月を経て、発掘調査によって土中から姿をあらわしたのである。

残っていたのは土中に埋まっていた部分だけなので、地上部分の高さはわからないが、樹種はほとんどがクリである。縄文人にとってクリの実は重要な食物であり、植樹していたという説もある。また、クリ材は腐りにくいので選ばれたのだろうか。

現在「環状木柱列」「円形木柱列」などとよばれる遺構は、一九八〇年代から石川県・富山県を中心に約二十遺跡で発見されている。

その代表的な遺跡である石川県能登町・真脇（まわき）遺跡では、六本から十本の柱が直径六メートルから八メートルの真円形（環状）に配置されている。柱は一本の丸太ではなく、クリの木をカマボコ状に半分に分けたもので、平らな面を環の外側に向けて（円弧の面は環の内側に向けて）立てられている。

出土した柱の直径は五十センチメートル前後から九

十センチメートル以上であるから、立てられた当時は巨大な柱が林立した光景であっただろう。しかも、同じ場所に何度も同じ方法で立て替えられているのだ。

環状木柱列が作られた目的や用途は、発見されて三十年以上たった現在でもよくわからない。しかし、縄文時代の人々にとって、特別な意味を持つ「聖なる場」だったのではないか、という大方の研究者の推測は、おそらく当てはまっているのだろう。

ここでさらに想像をふくらませれば――。

大きなクリ材を割って、平らな面を外側に向けて立てる：これによって、真円形の柱列全体が一本の巨大な柱となったのではないか。

柱を立てるというと思い出されるのは長野県・諏訪大社の「御柱」である。御柱の起源についても諸説があるが、大社創建よりもさらに古い時代、諏訪地方で行われていた祭祀で神の依り代とされたのではないかという説もある。

環状木柱列も、神が降りるのにふさわしい柱を立てることが目的だったのではないだろうか。

では、巨大な柱のモデルとなるような巨木は存在したのだろうか。縄文時代の遺跡から発見された、長さ十メートルを越える丸木舟をみれば、巨木の存在は想像できる。伝説となったような巨木の存在も、当時の人々の記憶に伝えられていたのかもしれない。天空を目指す巨大な柱を。



志々島の大楠（香川県三豊市託閭町志々島）



志々島の大楠

―現在―

森なのに、木立があるわけではない。一本の木が森を作っている。思わず息をのむ。

香川県三豊市の港から船で二十分。ここは瀬戸内海に浮かぶ志々島。かつて千人もの人が住んでいたというが、現在は二十人ほどが暮らす小島である。

島の北部にある大楠は志々島のシンボルといえる存在で、香川県の天然記念物にも指定されている有名な巨木である。樹齢は千二百年、樹高は約二十三メートル、幹まわりは約十二メートル……という知識は、大楠を目の当たりにしたとたんどこかへ飛んでしまった。圧倒的な自然の前には、浅薄な知識などは虚しいものだ、と思う。

志々島の大楠は空を目指してそびえ立ってはいない。太い腕のような枝がうねうねと四方に伸び、その広がりには視界に入りきらない。大地が樹の姿となって地上に現れたようだ。天空を支える大樹だ。

島を守っているというプロジェクトが進行中で、大楠はそのシンボルだ。大楠のまわりもボランティアの人によって草刈りが行われ、枝の支柱も整備されている。島を訪れる人は少しずつ増えているようで、必ず大楠に会いに来て、さまざまな想いが捧げられる。大楠は島そのものの。永劫の命を、と祈らずにはいられない。

（追記）七月の西日本豪雨で志々島も被害に遭った。ただ、大楠は無事、との報せが住民の方から発信されている。

（文・写真／たまい・ゆかり）

本を読む。

小河洋友

(おがわ・ひろとも／図書館司書)

「樹木と人間」をテーマに五冊を選んでみました。身近な日本の樹木を学べるものから、樹木によって育まれた人類の歴史文化に関する考察までが集まりました。静謐で巨大な森林のなかで、また一本の木の下で人はなにを思ってきたのか、想像が膨らみます。

世界の巨樹と

絶景の森

濱野周泰／監修

学研パブリッシング
(2015.7)



樹木と名字と日本人

—暮らしの草木文化誌—

有岡利幸／著

八坂書房 (2018.1)



樹木の文化史

知識・神話・象徴

フランシス・ケアリー／著

小川昭子／訳

校風舎 (2015.12)



木を知る・木に学ぶ

なぜ日本のサクラは美しいのか

井田茂／著

岩波書店 (2017.2)



樹木讃歌

—樹木と人間の文化誌—

ノエル・キングズベリー／著

荒木正純ほか／訳

悠書館 (2015.10)



人間に畏敬の念を抱かせる巨樹。マダガスカルのパオバブ、日本の縄文杉など神々しさを感ぜさせる世界の巨樹・高齢樹の数々を美しい写真で紹介しています。樹木だけでなく、それら巨樹が生息する森林についても解説。生態系の神秘を感じることができます。

植物文化史の第一人者による日本の草木に関するエッセイ集です。独自の調査で姓・名字を分析した「樹木大好き日本人の名字」を収録。樹の名前を名字にしてしまうほど日本人は樹木大好きとのこと。樹木を生活の中に取り込んで利用し、愛してきた樹木の特性がわかります。

大英博物館所蔵の樹木の標本帳、スケッチ、工芸品などを通じて、われわれの歴史に樹木がいかに重要な意味を持っていたかを考察しています。樹木は人間と自然、そして神を結びつけるものであったとのこと。科学と芸術、旅行と交易など裾野の広い文化史として読み解いています。

「なぜ日本の桜は美しいのか」、「歴史になった樹木・高田松原の一本松」、「日本人なら漆を知ろう」などなど：日本の代表的な樹木十三種の魅力を樹木医の著者が解説しています。木を知ることが日本人を知ること。樹木が日本文化の礎であることがわかります。

人類の歴史文化を形成してきた樹木。ある種の樹木は神の宿る場所であり、あるものは食糧を、あるものは食糧を、またあるものは安全な棲家や便利な道具を提供してきました。樹木に対する畏敬の念に溢れた文章と美しい写真で人と樹木の数千年に及ぶ関係を解き明かします。

サカキ

荒谷 渚



神社や神事などで馴染み深い植物である、サカキ。漢字で書くと、「神」様の「木」で「神」と書きます。

もともと「サカキ」という言葉は、常緑樹全般を表す言葉で、ある特定の木を指した言葉ではなかったそうです。

サカキという呼び名の由来については、諸説あります。神様の世界と人間の世界との境界を示すための木、つまり「境木」が転じたという説や、神聖な木を意味する「賢木」、または、常緑樹で常に葉が茂っていることから「栄木」が転じたという説もあります。

かつて日本人は、山の向こうに穀物の神様がいるのだと考えていました。穀物の神様が里に降りて来て畑に宿り、穀物を成長させる。そして秋に収穫されると、また山へ戻って行くと思われていました。

冬になり、人里の木々が落葉して寒々しい景色になった頃、穀物の神様がいる山にはまだ青々とした常緑樹が沢山あるのを見て、冬でも落葉しない常緑樹は、「神の世界」と「人の世界」の境に立つ木だとされたのです。

では何故、数ある常緑樹の中で、現在「サカキ」と呼ばれる木だけに名が残ったのでしょうか。

様々な説がありますが、一つには、日本では古来より植物や先端が尖ったものには神様の力が宿ると考えられているため、サカキの葉の先

玉串（本榊ホンサカキ）



端も尖っていることから、神様が降り立つ依り代として使われるようになったのではないかとされています。

サカキは暖地の山林に自生するツバキ科の常緑樹ですが、関東より北の寒い所では育たないので、代わりにヒサカキなどの別の常緑樹を「サカキ」として使う地域もあります。

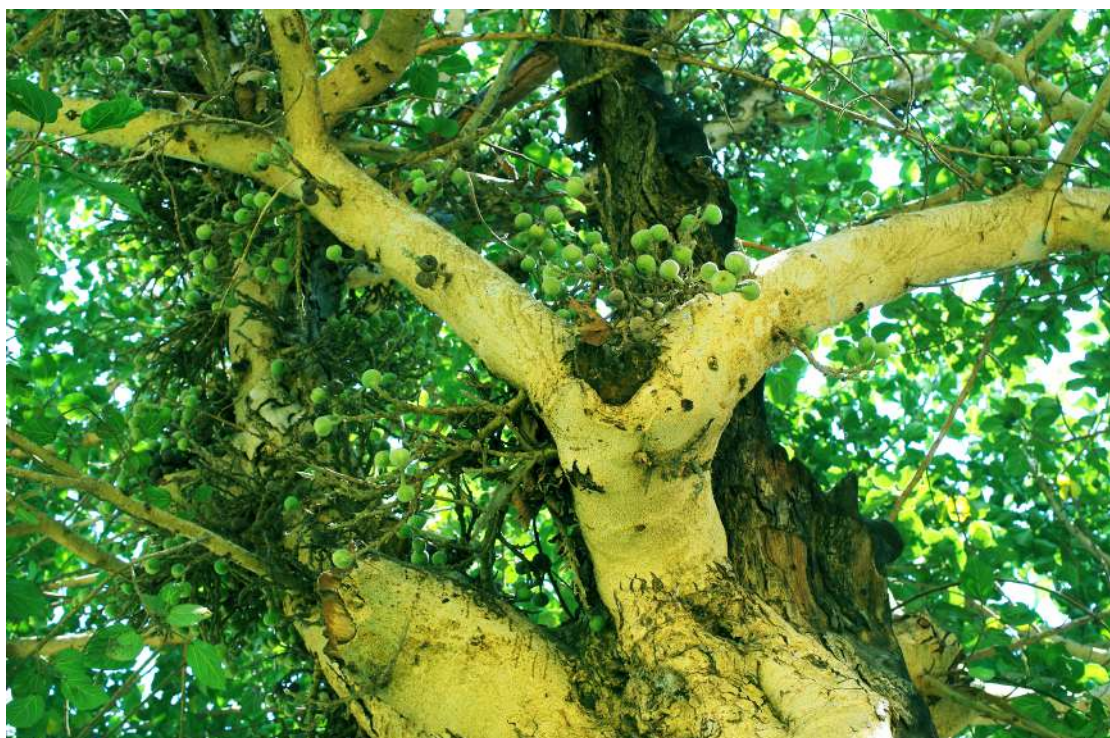
そもそも常緑樹の枝を使用するのは、一年中緑を保つ姿が神様の尽きることのない恩恵を表しているからだと言われています。欧米でクリスマスに常緑のモミの木を飾るのも、永遠の命と繁栄を表していますが、キリスト教が始まるより遥か以前から、常緑樹を神事に使っていた記録が残っているそうです。

遥か昔から今に至るまで、常緑樹は世界中の人々から神聖な存在として大切にされてきたようです。

（文・写真／あらたに・なぎさ）



姫榊（ヒサカキ）



女神とイチジク

goddesses and figs

和田浩一郎(エジプト学研究者)

古代エジプトでは星や月、さまざまな動物や鳥が神の化身と見なされ、崇拝の対象になっていた。他方で植物は、神話や宗教儀礼のなかで重要な役割を果たしていたものの、草木そのものが直接、崇拝の対象になっていた事実を認めることはできない。そのなかでシコモアイチジクというイチジクの一様は、女神と深く結びついた神聖な樹木という地位を獲得していたことが知られている。

古代エジプト人が「ネヘト」と呼んだシコモアイチジク (*Ficus sycomorus*) は、東地中海地域の一部とアフリカ大陸中部に自生する常緑高木である。ローマ属州時代(前一世紀〜紀元七世紀)にエジプトイチジクという別称が付けられていたのとは裏腹に、この木はエジプトの自生種ではなかった。イチジクの受粉は、樹種ごとに種類の異なるイチジクコバチというハチが担っているのだが、ナイル川下流域ではシコモアイチジクに対応する種が、早くに絶滅してしまったのだという。先王朝時代(前四〇〇〇年頃)にエジプトに導入されたこの樹木は、現在の日本における栽培法と同様、挿し木から育てられたと考えられている。

シコモアイチジクには、手間をかけてでも育てるだけの価値があった。古代の地中海世界で最良の木材は、遠くレバノン山脈で切り出されたレバノンスギだったが、当然これは高級材で数も少なく、使用できる人間は限られていた。大木になる樹種が少なかったエジプトにおいて、シコモアイチジクは木材になる貴重な樹木だった。だがこの木の価値はそれだけにとどまらない。日差しが強く乾燥したエジプトにおいて、喉を潤す甘い果実と大きな木陰を提供するこの木は、人々に憩いと活力を与える存在としても重宝されたのである。

人々に多くの恩恵をもたらすシコモアイチジクの神聖視は、古王国時代・第五王朝（前二四九〇～二三四五年頃）にはすでに認められ、さらに新王国時代・第十九王朝（前一二九五～一一八五年頃）には、ヌウトやハトホルといった有力な女神と関連づけられるようになっていく。手に献水用の容器と食べ物を持つ女神がイチジクの木から姿を現わす描写が、この時代の墓壁画や『死者の書』の挿絵にしばしば登場する。こうした「木の女神」は、地下世界で死者の渇きと疲れを癒す存在と見なされた。『死者の書』第五九章には、「おお、このヌウト女神のシコモアイチジクよ、あな



木の女神と死者たち



頭にイチジクの木を載せた女神

たの中にある水と空気を私に与え給え。」という女神に癒しを求める言葉が見られる。女神は手に持つ容器から水を振りまき、死者はそれを両手で受けて活力を得たのである。

子供の出産の場でも、シコモアイチジクは象徴的役割を果たしていた。エリート層の妊婦は、地面に突き立てられた二本のイチジクの間で出産を行ったのである。この出産の場は地下世界の終着点、東の地平線の下にあるとされた、トルコ石でできた二本のシコモアイチジクから着想されたと考えられている。太陽は毎日、二本の木のあいだを通って地上に姿を現す。この太陽の出現にあやかって、子供の誕生が難なく行われることが祈願されたのだろう。

シコモアイチジクは文字通り、揺り籠からあの世まで古代エジプト人を支える、生命の木だったわけである。

（文・写真／わだこういちろう）

【参考文献】

和田浩一郎『古代エジプトの埋葬習慣』（2014）株式会社 ポプラ社

wagashi

和菓子

めぐり

辻本 彩

(一) 落雁 らくがん

私は幼い頃から落雁、それも高級品ではない麦落雁が大好きでした。当時食べていたおやつ
の商標だったのか、「麦こがし」が麦落雁の事だと
ずっと思いついていたのですが、「はったい粉」
自体の事を麦こがしと言うのですね。つい最近
知りました。そしてはったい粉は手軽に購入で
きる事も知り、これと和三盆糖を合わせて練っ
て、おやつにして楽しんでおります。日本茶に

とても合い、心なごむ
おやつタイムを過ごせ
ます。



はったい粉

さて落雁は和菓子の
ジャンルとしては「干
菓子」、その中の「打物」
に属します。穀物等を
粉末状にしたもののへ砂

糖と水飴等を加えて型に入れ、水分を飛ばして
固めたお菓子です。室町時代くらいには原型と
なるお菓子が日本へ伝わり、江戸時代には砂糖
をふんだんに使う事から上菓子であったり、駄
菓子類と同列であったりと、どうやら高級品と
庶民用に分かれていた模様です。使われる材料
は麦だけではなく、米、大豆、小豆、栗など、
比較的身の回りにあり、砂糖と相性が良く香ば
しいものが選ばれています。

今回この記事を書くにあたり、やっぱり食べ
てみたいとね！と、大麦、大豆、栗の落雁をお
取り寄せてみました。松江や金沢や京都の上
品な落雁は今回パスし、好みの素朴な落雁を集
めました。素朴といえども、香ばしさとホロリ
とした口どけがたまりません。

大麦を使った落雁は日本各地にあります。今
回は館林の三軒屋さんから取り寄せました。
麦の産地である上州（群馬県）で、十九世紀か
ら続く麦落雁です。格式高いデザインなのに小
ぶりで愛らしい姿、そして麦の香ばしさと優し
い甘さが何ともいえません。いくらでも食べて
しまいます。ちなみに麦は初夏が収穫時期で、
その粉である「麦こがし」は夏の季語、今の季
節にピッタリですね。

豊島堂の大豆製「小鳩豆楽」は、鎌倉の寺院
でお抹茶に添えてあるのを食べたのが出会い
で、何とまあ可愛らしく美味しいお菓子なこと、

と感動しました。
食べ慣れた今でも、
姿の可愛らしさと
美味しさは格別で
す。ちなみに大豆
原料のものは福井
県の豆落雁、小豆
のものは秋田県の
諸越が有名です。

栗の落雁は、産

地として名高い長野県の小布施でよく作られる
そうです。しかし原料は赤えんどう豆。昔は栗
粉で作っていたものの、現在では再現不可能と
いう事で、赤えんどうの豆粉をベースにしつつ、
栗蜜や栗粉で風味をつけるそうです。職人さん
達のご苦労が偲ばれます。その甲斐あって栗独
特の甘味がくせになる落雁です。

今回お取り寄せしたもの以外にも、全国には
お茶の時間にピッタリな、美味しく愛らしい落
雁がたくさんあります。酷暑の今年、サラッと
素朴な甘味を持つ落雁を、冷たい麦茶のお供に
添えてみてはいかがでしょう？

（文・写真／つじもと・あや）

【参考文献】

中山圭子『事典 和菓子の世界 増補改訂版』
2018年 岩波書店／青木直己『図説 和菓子
の歴史』2017年 筑摩書房



豆落雁

栗落雁

麦落雁



ウイグル族のパン屋

部屋から出ない日曜記

谷口明子（陶芸家）

惰性でネットを見ていたら、アフリカのガーナでは、予め故人にまつわるデザインの新棺桶を作ってもらい、死んだらそれに入ることができる、という記事を発見し、うらやましく思った。いくつか実際の棺桶の写真が出ていたが、カラフルな動物型とか、コーラの瓶型とか、不思議な模様が彫りこまれたものとか、どれも心躍るものであって、これに入って出発するのなら、見送る側にとっても、あまり遠くに行ってしまうわけではない感じがして、且つ場合によっては笑えていいんじゃないかな、と思う一方、死んだらそういう個人の趣味趣向みたいな現世的な暑苦しいものから解放され、異界に送られるため一律の形状の厳粛な箱に納められるほうがやはり精神的に清涼で、そして納得がいくものかな、とも思ったり……。などと打ち込んでいるうちに雨脚ががangan強まっていく梅雨の日曜夕方。今。家から一歩も出ずだれとも口を利かなかった休日の後半というのは、だいたいこんな感じの深みに沈殿してゆく。場合によっては大昔ものすごく怒られたときのセリフが正確によみがえってきたり、去年行った中国で食べたウイグル族の平たいパン、及びそれをちぎる感触、が脳裏をよぎったり、いろいろだ。ヒトの頭の中は、基本このような脈絡のないことが浮きつ沈みついていて、でもそれをだだ洩れにすると話が進まない。のでみんな外の世界に向かうときはある程度脈絡があるようにまとめているだけなのだ。と思うそばからああ、旅の準備をしたい。最近手に入れた青いスーツケースに荷物を詰めたい。

（文・写真／たにぐち・あきこ）

授与品のご紹介

巾着袋付き
御朱印帳

弥生神社で手
作りしました
御朱印帳で
す。巾着袋と



セットでお分けしています。蛇腹
のページは奉書紙を使い、表紙は
綿と絹があります。絹布は和服を
リサイクル。布の部分によって一
冊ずつ柄が違いますのですべて一
点もの。ひとつひとつ丁寧に奉製
しました。光沢のある綾子や素朴
な味わいの紬、リバティプリント
の綿、大島紬、紅型、金系の刺繍
：様々な素材の組み合わせや手触
りもお楽しみください。



社務猫ちよろ

かつをの割り節(袋入りの)
にはまっています。フワフワ、
ガサガサ、しっとり、かた
め、どれもうまし。ひげに
くつつくのが難点ね。



社務猫きーこ

夏休み 我泣きぬれ
ずにとかけとたむわ
る…です。
しっぽのコレクション
ンしてるの。

編集後記

長い期間を経てようやく十四号の製作を終えました。執筆者の
皆さま、発行までご協力いただいた皆さまに深く感謝いたします。
頁ごとそれぞれの世界と言葉が束ねられ、ひとつの小さな本にな
り、この場所から世に開かれていくという有り難い出来事を、今
感慨をもって迎えています。

木と祈り。木、樹は私たちの生活文化において親しみ欠かせな
い材として身近にあり続けてきました。同時にその強靱さに圧倒
されたのか、美しさと思議さに魅了されたのか、伐採し続けた
その罪悪感か、様々に祈りを捧げ意味を刻みつけ、護符として身
に着けました。あるいは神事の中心に木々を据え、家の守護とし
て彫刻を施した柱を家前に立てました。世界中で古より木は特別
な存在だったのです。梲を切りだす木地師の技は木と語りながら
磨かれ、能面作りの職人は木目を肌のきめとして浮き上がらせ、
命を込めるといいます。木の魂と向き合う祈りに似た行為といえ
るでしょう。実用も装飾も技術も感性も融合し、木と人の間で様々
に行き交います。そこには利便性や効率性といった一方的な価値
観は意味を成しません。木には内に脈々と流れる、しっかりと大
地に根づく力強い生命があり、私たちはたしかにそれを感じられ
るからです。今夏、プナの森を歩きました。潤った空気の清浄さ
と踏みしめる厚い腐葉土の柔らかさ。プナの木々が水を貯え栄
養分を作り、森全体を(ひいては川、海を)豊穡にしている。そ
の循環の中ではまた人の心身もどこか満たされるのでした。

弥生神社では宗教・文化講座が始まりました。国も時代も超え
て語られる文化や宗教のこと。参加者の皆さまと考える場にな
ってきたら願います。この小さな一歩があちこちの心の中で呼応し
て何かが動き始めますように。(権欄宜池田奈)

印刷 文明堂印刷

編集発行 弥生神社 神奈川県海老名市国分北 二一三三十三

